

あえてスマホを使わせ、 双方向性と参加意識を高める

学生にとって、スマートフォンはそれなしでの生活は考えられないほど身近な存在だ。授業中での使用には賛否両論がある中で、間野教授はあえてスマホを使うことを前提とした授業を実施している。その決断がもたらす効果とはどんなものだろうか。



間野 義之
スポーツ科学学術院 教授

「わせポチ」やネット検索で、 学生に参加意識を持たせる

間野教授が担当している「スポーツ政策論」という授業では、学生全員にスマートフォン、タブレット、PCのいずれかを持ち込むことを必須としている。たとえば、ある法律について説明をするときには各学生の端末からインターネットで検索させて条文を参照してもらおう。「以前はその部分を印刷して配ったりしていましたが、その場で検索させれば、印刷する手間はなくなるし、ペーパーレスにもなります」。必要なら各自PDFでダウンロードしておくこともできるし、検索の履歴は各自の端末に残るので、後から何度でも参照できる。「紙で配ったものはどこかに置き忘れたりしてなくしてしまうかもしれませんが、その心配もなくなるので、復習に使うときにも便利はなはずです」。

さらに、スマホから出題に答える「わせポチ」も導入している。その日のテーマに合わせた設問を授業の冒頭で2、3問出題し、そこから話を広げていくという使い方だ。出題する問題は当日教場へ向かう電車の中で、スマホから作成するという。「移動時間を使って作業できるので負担にはなりません。その日のニュースに関連したホットな話題を盛り込めるのもいいですね」。

選択肢から選ばせるもの以外に、学生に意見を求めて自由記述で回答させるという使い方もしている。「学生が投稿する内容が5秒ごとに更新されて画面に表示されていくので、この意見はおもしろいね、などと言いながら授業を進めます」。投稿の内容がすぐにスクリーンに表示されてしまうと、不適切な発言があった場合のリスクが懸念されるが、実際には非常識なことを書く学生はいないという。わせポチへの回答は匿名としており、参加は自由。あくまでも学生の参加を促し、関心を高めるためのツールという位置付けだ。

わせポチを利用する前は、専用端末のクリッカーを使っていた。「FDでカナダへ行った先生から大教室の授業にはすごく有効だと聞いて使ってみました。授業中での質問に挙手をさせて人数を数えるということをしていたので、これは便利だと思ったのですが」。実際に使ってみると、端末の配布や回収で時間も時間もかかるのが難点だった。「それに比べるとわせポチは学生のスマホからさっと参加させることができるので、格段に手軽ですね。自由記述も使

えるし、学生たちもスマホの操作には慣れているので、文字打ちも速くてスムーズに利用できています」。

授業のやり方を改善すれば、 学生の反応は良くなる

授業中に自分のスマホを使わせることについて、昔は禁止していたこともあったという。「しかし、今は学生が当たり前に使っているものなので、授業中は一切使うなというのも無理があります。それならむしろどんどん使っていくべきだと思うようになりました」。実際に積極的に使わせてみた結果、「自分のスマホを使えるのは気が楽だ」と学生からも好評だった。知りたいことを検索して調べたり、スマホを通して意見を述べたりするのは、学生にとっての日常行為であり、それを公に認めることはある意味自然な流れといえるかもしれない。

スマホを容認すると学生が授業以外のことに使うのではないか。そんな心配については「学生が寝たり内職をしたりする授業は、教員の側の教えるスキルの問題」と考えている。「人を90分夢中にさせるのは大変なことですが、それをやるのが僕らの仕事だと思っています」。

2002年に民間のシンクタンクから早稲田に赴任した当初は、90分間にスライドを50枚使うなど「企業のプレゼンみたいな授業」をしていたと振り返る。「学生はどう見ても分かっていないようだし、授業評価も低いという結果を受けて、ひとりよがりであったことを反省しました」。翌年度からは思い切ってスライドは6枚に厳選し、90分しっかり伝えることを意識するようになった。毎回コメントペーパーを書かせ、その内容を次回の授業で紹介するなどいねいな対応を心がけたところ、学生の反応が良くなったことを実感すると同時に評価も上がった。「学生がつまらなそうにしているのを見るとこちらも苦痛だし、徹夜してスライドを用意しても手応えがないのでは辛いです。しかし、こちらが改善すれば学生の反応も変わるのだということを実感しました」。

授業の進め方を変えた根底には、「～を理解させる」という授業から「～できる能力を身に付けさせる」という意識の変化がある。「この授業が終わったときには、日本のスポーツ推進計画の骨子を

立案できるような能力を身に付けてほしいと願っています」。

SNS利用の 危険性にも留意する

授業の最後には課題を出し、それを翌日の23:59までに提出させる。この授業では出席を取っていない代わりに、この課題の提出が出席点としている。提出をCourse N@vi経由にすることで、自動的に期限厳守となる。提出された課題はエクセルに落として次の授業でスクリーンに映して見せる。「特に興味深いものをハイライトして紹介しています。褒める話なので、意図的に学生の名前も公開するのがポイントです」。

Course N@viはお知らせ機能なども使っているが、成績の管理が行える点を最も高く評価している。「成績データはクラウドにあるので、自分のPCで保管する必要がありません。データの管理に気を遣わなくていいのでとても安心です」。

ゼミでは学生とのコミュニケーションにLINEも利用している。ゼミ長と直接連絡に使うほか、グループを作って質問を受け付けたり、プレゼン担当学生の資料の共有化をしている。ただし、ゼミ長以外の学生との個別連絡にはLINEは使わないと決めている。学生からは「LINEで直接つながりたい」という声もあるが、トラブル防止のため、特定の学生と個人的なやりとりをすることは避けている。SNSの危険性という点では、特に部長をしている柔道部の学生には、軽はずみな投稿はしないように戒めている。「いつどこで足を引っ張られるかわからないので、仲間内だからと気を抜かず、流出するリスクを常に考えて発言するよう注意しています」。

一方で、毎年ゼミではその代のメーリングリストをつくり、卒業後もゼミとしてのつながりをつくることを意識している。350人を超えるOBOGを含めて、全年代をつなぐための一斉MLも作成している。毎月1回なにかしらのイベントがあるほか、合宿にも多数のOBOGが参加するという。「学生にとってゼミは一生の仲間ができる場であってほしいと思っているので、歴代のOBOGも含めて良いネットワークを作ってほしいですね」。

将来的には、3DやVRなどの最新技術を組み込んだ授業のアイデアを温めている。「スポーツは映像と親和性が高いので、いろ

いろ新しい試みができそうです。スポーツビジネスシミュレーションゲームを使わせてみるのもおもしろいと思います。インターンシップでは失敗は許されないけれど、ゲームならいくらでも失敗体験が積めますから」。

個人的にもスマートウォッチを愛用するなどICTツールを積極的に使っている間野教授。インターネット検索やわせポチ、LINEなどを授業に使うことは、いたって普通のことだと捉えている。「今、第四次産業革命といわれている時代に、学生が当たり前に使っているものは、どんどん取り入れるべきです。こういうものを使うと学生の目の輝きが違われ、参加意識が高まることは間違いないです」。